

柱	R 7 年度の主な取組内容
I 意識 改革	①三木モデルの取組の全体像を教職員に伝えていく。 ②授業づくりの4つの視点に焦点を絞り、これまでの取組を継続していく。 ・希望制による学校訪問研修の実施(5～6月) 授業改善の4つの視点を具体化 ・E D I X 関西で行われるセミナーへの参加…最新の教育の状況を学ぶ ・L D X スクールの視察…授業改善への意識付け ・全教職員向け夏季全体研修の実施 ・校内研修や研修部会と連携し、指導主事が学校を訪問する機会を増やすことで、「三木モデル」とつながる実践を広げていく。
II 授業 改善	①プロジェクト会議と学力向上対策委員会との継続的な連携 ②「授業改善の4つの視点」を、授業者がどのように取り入れていくのかを明確にする。 ③子どもの変容を捉える評価の指標を模索する。 ④教育センターと研修講座との連携 ・授業づくりについてワークショップや miki education days (夏季研修)
III 情報 の 共有	①さまざまな研究会・研究授業を市内全体に (Team s 等で) 周知していく。 ②学習プラットフォーム (UMU) を活用した研修プログラムの作成と実践

今後の課題と方向性

基礎学力定着化事業の結果をもとに、どのように授業を見直し、子どもたちの基礎学力の向上につなげていくかが、今後の大きな鍵である。それには、調査結果を適切に分析する「指導と評価の一体化」に関する教員の資質・能力の向上が図られることが重要である。数値の上下に一喜一憂するのではなく、その数値が示す子どもたちの学びの実態や変容を多面的に捉え、日々の授業の中でどのような工夫や指導がなされていたのかを、校内で対話的に振り返ることが求められる。「その学年では学習指導上、何が大切にされていたのか？」や、「その先生がどのような授業を行ったのか」等を共有することが、組織的な授業改善の原動力となる。

こうした視点から、教職員が調査結果を「評価の素材」として活用し、「子どもたちの資質・能力を伸ばすために、どのような授業を行ったのか」というプロセスに目を向けることで、単なる点数の比較ではなく、学力向上の本質的な要因を見極めることができるようになる。

また、授業改善の取組を校内で共有し、継続的に見直ししながら進めていくためには、校内研修の在り方やリーダーシップの発揮も重要である。校内で授業を見合い、語り合い、評価し合う文化を築くことが、組織としての「学び続ける力」を支える土台となる。

今後は、基礎学力定着化事業のデータを一人一人の子どもの成長の証と捉え、学びの過程に焦点を当てながら、教員の専門性を高める研修や支援体制をより一層充実させていく必要がある。その積み重ねこそが、すべての子どもたちの確かな学力の保障につながっていく。引き続き学校・教員・教育委員会が一体となって取り組んでいくことが求められる。これらを踏まえた下記の方向性のもと、今後の取組を推進していく。

- ・「三木モデル」の着実な定着と深化を図るためには、継続的な現場支援と教員の力量形成が不可欠である。
- ・成果を単なる数値で終わらせず、その意味を現場で読み解き、授業改善に活かす「対話と内省の文化」が必要である。
- ・子ども一人一人の成長実感を経験とした、形成的評価のさらなる工夫・共有が求められる。
- ・教職員の「エンパワーメント (力づけ)」による組織的な前進を重視し、今後の取組に反映していく。